

二〇一三年一月二五日
発行



第96卷 第1号 史学・地理学・考古学

特集 災害

史学研究会

京都大学大学院文学研究科内

特集 災 害

特集「災害」によせて……………小 山 哲 (1)

論 説

発掘調査より知られる貞観一一年 (八六九)

陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興……………柳 澤 和 明 (5)

室町時代の災害と伊勢神宮……………山 田 雄 司 (42)

一五八〇年ロンドン地震と神罰……………楠 義 彦 (71)

社会の流動性とレジリアンス……………窪 田 順 平 (100)

——中央ユーラシアの人間と自然の相互作用の
総合的研究の成果から——

ボリシェヴィキ権力と二一／二二年飢饉……………梶 川 伸 一 (128)

三・一一複合災害における避難の地理空間……………小 田 隆 史 (167)

——「フィールド」体験と実践の記録から——

書 評

マイケル・R・ウォーターズ著

(松田順一郎・高倉純・出穂雅美・別所秀高・中沢祐一訳)

『ジオアーケオロジー——地学にもとづく考古学——』……………富 井 真 (208)

A. Janku, G. J. Schenk, and F. Mauelshagen (eds.),

Historical Disasters in Context: Science,

Religion, and Politics……………大窪一也・住友一木
福元健之・増永理考 (215)

山崎正勝著

『日本の核開発：1939～1955

——原爆から原子力へ——』……………山 本 昭 宏 (221)

紹 介

山口弥一郎著、石井正己・川島秀一編『津浪と村』……………相 澤 亮 太 郎 (228)

2012年度史学研究大会講演要旨

2012年度史学研究会大会・総会の記録

演内容は本号に掲載されているので参照されたい。本年も盛況で、約一五〇名の参加者を得ることができた。

公開講演ののち、杉山正明理事が閉会の辞を述べ、引き続き文学部地下大会議室にて懇親会を開催した。

(文責 井谷鋼造)

史学研究会会則

(二〇一〇年一月二日改正)

第一条 本会は史学研究会と称する。

第二条 本会の事務所を京都大学大学院文学研究科内に置く。

第三条 本会は広く歴史に関心を持つ者が集まり、史学・地理学・考古学に関する研究を行うことを目的とする。

第四条 本会の事業は次の通りである。

1. 総会・大会・例会等の会合
2. 会誌『史林』等の発行

第五条 本会に次の役員を置く。

理事長一名、理事一五名以上三五名以内
(内常務理事四名)、監事二名、評議員
四〇名以上六〇名以内、委員若干名

第六条 役員は理事会及び評議員会によって選出され、総会の承認を受けるものと

する。理事長は本会を代表し、会務を統括し、会員総会、理事会及び評議員会を招集する。理事は理事会を構成し、会務を処理する。とくに常務理事は、庶務・編集・会計・広報の各事務を担当する。監事は会計経理を監査する。

第七条 委員は理事長より囑託され、編集・庶務の実務を分掌する。

第八条 役員の任期は、委員(任期一年)を除き、二年とする。但し、再任をさまたげない。

第九条 本会は第三条に掲げた目的に賛同する者をもって会員とする。会員は次の二種類とする。

1. 正会員
2. 学生会員

第十条 会員は会誌『史林』の配布を受け、かつこれに投稿し、また総会に参加することが出来る。

第十一条 会員は、退会届を事務局に提出し、任意に退会することができる。また、会員が次の各号のいずれかに該当する場合には、退会したものとみなす。

- (1) 本人が死亡し、または会員である団体が消滅した時

(2) 会費を三年間納入しない時

第十二条 会員は、所定の会費一年分を前納するものとする。会費の納入を二年分怠った時、雑誌の送付を停止される。さらに一年間会費の納入を行わない場合、会員の資格を喪失する。

第十三条 会員が既に納入した会費は返還しない。ただし一年分を超えて前納している場合には、一年分を超える部分を返還する。

第十四条 毎年秋季に大会を開き、また適宜例会を開く。会場等はその度にこれを定める。

第十五条 毎年秋季において総会を開き、会務の報告を行ない、承認を受ける。

第十六条 本会の経費は会費、事業収入及び寄付金を以て支弁する。会費は誌代を以てこれにあてる。

第十七条 本会の会計年度は四月に始まり、翌年三月に終わる。

附 則 本会則の変更は、会員総会の決議によるものとする。

但し会務執行に必要な細則及び物価変動に基づく会費金額の変更は理事会がこれを行う。

『史林』投稿規定

- ◇資格 本会会員であること。
- ◇投稿受付原稿の種類、長さ
論説 1段組54字×19行の体裁で、三三〇〇字以内
- 研究ノート 2段組29字×20行の体裁で、二〇〇〇字以内
- 研究動向 2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇〇字以内
- 史料紹介 2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇〇字以内
- 書評・論文評 2段組、八〇〇〇字以内
- 紹介 3段組、一二〇〇字程度
- ◇いずれにおいても、本文や注だけでなく謝辞や図表・翻刻を含めて、それぞれの紙幅に収めること。
- ◇注は各章末に入れること。
- ◇「欧文タイトル」を添付すること。
- ◇論説には「要約」(四〇〇〇字以内)を添付のこと。「要約」は上記の紙幅制限の対象外とする。
- ◇論説および研究ノートの投稿者は、掲載が決定した時点で、「欧文要約」(六〇〇〇～八〇〇〇語程度)を提出すること。なお、

英文要約に限り、翻訳による作成依頼も応じるが、経費は投稿者負担とする。

- ◇投稿に際しては、(1)プリントアウト一部もしくはPDFファイル、および(2)電子データを送付する。電子データに関する詳細は下記「補足」の「電子データ作成要領」を参照。電子データを準備できない場合は、あらかじめ事務局まで連絡すること。

◇図版を用いる場合は、下記「補足」の「図版作成要領」に従って作成、添付すること。

注意：編集委員会において、印刷技術上、図版の修正や特殊活字の作成を要すると判断し、これを業者に委託した場合には、その経費の一部、数千円～数万円を負担していただきます。あらかじめご了解下さい。

送り先：史林編集委員会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科内 史学研究会

『史林』投稿規定「補足」

〈電子データ添付要領〉

・電子データは、フロッピーディスク、C

DR、CDRW、USBフラッシュメモリーなどのメディアに保存して郵送することを原則とする。郵送に不便があるなどの事由で、メールによる投稿を希望する場合は、あらかじめ事務局に問い合わせること。

・本文の電子データは、マイクロソフト・ワード、一太郎、テキストファイルのいずれかの形式で保存し、保存形式(OSおよび使用ソフト)を明示すること。

・図版に電子データを使用する場合には、300dpi以上の解像度とする。ソフト(IllustratorやPhotoshopなど)やバージョンについて事前に照会・確認をすること。

〈図版作成要領〉

・本文原稿中に図版の割付箇所を注記すること。

・仕上寸法は、最大で170mm×110mm(キヤプション込み)とすること。

・図および写真は、仕上寸法の2倍(面積4倍)程度で作成し、希望縮尺率を明記すること。

・図は、トレーシングペーパーや製図用ケ

ント紙などに製図用インキで明瞭に描くこと。その際、線の太さを一定に保つため、製図用ペンを使用することが望ましい。

・図中の文字は写真植字を用いて印刷するので、鉛筆書きするか、上にトレースグベーパーを重ね該当箇所に文字のみを書き入れること。また、インスタントレタリングやワープロ文字を原図に貼り付ける場合は、仕上段階の鮮明度を配慮すること。

・写真は、原版が十分に鮮明でコントラストが明瞭なものを選ぶこと。なお、巻頭にアート紙で印刷することを希望する場合は、割付・仕上等は編集委員会で調整する。その経費は投稿者負担とする。

・表は、仕上を配慮して、文字数や表現法を工夫すること。原表の掲載を希望する場合は、その旨を明記し、図版に準じた体裁を整えること。

注意：図表に不備がある場合は、投稿者に修正を依頼するか、編集委員会が修正します（経費は投稿者負担となります）。

〈論文等の電子的公開について〉

・著者が論文等を任意のサーバーに、機関レポジトリ等を使って公表する場合は、以下の条件を満たすことを要する。この条件を満たす限りにおいて、本会への承諾いは不要とする。

- イ) 『史林』の版面をそのままPDFファイルなどにして公開する場合は、掲載誌刊行後、二年を経過していること。
ロ) 論文の出版を明らかにすること。
ハ) 営利目的でないこと。

(二〇一〇年二月改定)

受 贈 誌

(二〇一二年一月三〇日)

(二〇一三年一月八日)

- 中山大学学报 社会科学版(中山大学学报
編集部) 五二—三
史迹と美術(史迹美術同友会) 八二—九
立命館文學(立命館大学人文学会) 六二—八
学習院大学東洋文化研究所 調査研究報告
(学習院大学東洋文化研究所) 五七
日本民俗学(日本民俗学会) 二七—二
海事史研究(日本海事史学会) 六九
歴史(東北史学会) 一一—九

史學雜誌(史學會(東京大学文学部内))
一一—一

社会経済史学(社会経済史学会) 七八—三
立命館国際平和ミュージアムだより(立命
館国際平和ミュージアム) 二〇—二

日本学刊 JAPANESE STUDIES(中国社
会科学院日本研究所中華日本学会) 二〇
一一—六

信濃(信濃史学会) 六四—二二
CHRONOS クロノス(京都橘大学女性歴
史文化研究所) 三四

日本研究 国際日本文化研究センター紀要
(国際日本文化研究センター) 四六
韓民族文化(釜山大學校韓民族文化研
究所) 四五

大和(大神神社社務所) 一一—四
政治経済史学(日本政治経済史学研究所)
五四—三五—五五—二

ANTHROPOLOGICAL SCIENCE (The
Official Journal of THE
ANTHROPOLOGICAL SOCIETY OF
NIPPON) 一一〇—二—三

人文地理(人文地理学会) 六四—一五
経済論究(九州大学大学院経済学系) 一四

四

東方學會報(東方学会) 一〇三

日本歴史(日本歴史学会) 七七六

経済科学(名古屋大学大学院経済学研究

科) 六〇―二

韓國史研究彙報(韓國国史編纂委員会) 一

五八・一五九

古代文化(古代學協會) 六四―三

史迹と美術(史迹美術同友会) 八三〇

龍谷史壇(龍谷大学史学会) 一三五・一三

六合併号

神道史研究(神道史学会) 六〇―一

立命館法學(立命館大学法学会) 三四四

編集後記

本会は二〇〇六年より、共通テーマのもとで専門領域を越えた議論をおこなう例会を四月に開催し、それを踏まえた特集号を翌年頭頭に刊行して参りましたが、それも今回で七度目となります。これまで「国境」「モニュメント」「環境」「戦争」「民族」「都市」というテーマが選ばれてきましたが、今回は「災害」。いうまでもなく、地震・津波・原発事故という災害の連鎖・複合によって多大な被害がもたらされた、東日本大震災をうけて企画されたものです。

本号には、昨年四月二一日(土)の例会でご報告いただいた柳澤・窪田・楠・梶川・小田各氏の論説をはじめ、山田氏の論説と書評三本・紹介一本をご寄稿いただきました。特集号が時代・地域・対象ともに多様となるのは常ですが、序言でも述べられるように、本号には従来の「史林」のスタイルからすると珍しい論説も掲載されており、そうしたなかでもとりわけ多彩な誌面となっております。

しかし、その多彩さの一方で、災害情報の解釈や伝達に関する意図的・無意識的なバイアス、災害(またはその背景にある環境変動)を契機とした人々の移動、近代化や科学技術と災害との関係、研究者の社会的実践の問題など、共通するテーマを各所にみいだすことができるのも事実です。「震災後」という時代に即応するような私たちで、通底する問題意識があることを、強く感じずにはいられませんでした。

本号は以上のような意味で、もうすぐ五〇〇号の節目を迎える『史林』の歴史のなかでも、特徴的な号になっているのではなにかと思います。ご多忙な時期かと存じますが、お楽しみいただけますと幸いです。

さて、次の例会テーマは、「移動」とのこと。まさに、本号でも問題となったテーマです。四月二〇日(土)、五名の方に報告をお願いいたしております(詳細は次頁をご参照ください)。みなさまのご来聴を、心よりお待ち申し上げます。

(山田徹)

◆史学研究会ホームページ・アドレス

<http://www.shigakukenkkyukai.jp/index.html>

本誌には独立行政法人日本学術振興会平成二四年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)が交付されており

二〇一三年一月二五日印刷 定価二、〇〇円
二〇一三年一月三一日発行

史林 第九六巻第一号(通巻第四九七号)

京都市左京区南本町京都大学大学院文学研究科内

電話 〇七五 七五三 二七八七
FAX 〇七五 七五三 二七八七

発行人

史学研究会
振替京都 〇一〇七〇二一五五番
理事長 上原真人

印刷所

中村印刷株式会社
京都市南区上鳥羽藤田二丁目

史学研究会例会のお知らせ

左記のとおり、史学研究会例会を開催いたします。参加は無料で、事前の予約も不要です。多数ご来会くださいますよう、ご案内申し上げます。

日時 二〇一三年四月二〇日(土) 午後一時～六時一五分

場所 京都大学文学部 新館第三講義室

テーマ 「移動」

プログラム

開会挨拶 史学研究会理事長 上原真人

趣旨説明

第一部 (午後一時一五分～三時四〇分)

櫻井康人 「『無料で運ぶわけではないし、神の愛のために運ぶわけでもない』——ヴェネツィア・ガレー巡礼船のパトロンたち」

近藤真美 「マムルーク朝期の駅通」

坂口満宏 「日本における国策移民事業の特質——移民会社海外興業の取り組みをめぐって」

第二部 (午後四時～五時三五分)

津田博司 「カナダにおける両世界大戦の経験とその遺産——「移動」としての総力戦と多文化主義の成立」

渡辺浩平 「自区内処理原則とこみの移動」

質疑および討論 (午後五時三五分～六時)

開会挨拶 京都大学文学研究科歴史文化学系代表

※プログラム終了後、懇親会(参加無料・予約不要)を予定しております。

Special Issue
DISASTERS in History and in our time

KOYAMA Satoshi, Foreword

Articles :

- YANAGISAWA Kazuaki, A Study on the Damage and Recovery
from the Great Mutsu Earthquake and Tsunami of the
Eleventh Year of the Jōgan Era (869), Based on an Analysis of
Archaeological Excavations (5)
- YAMADA Yūji, Muromachi-period Disasters and Ise Jingū (42)
- KUSUNOKI Yoshihiko, The London Earthquake and Divine Punishment ... (71)
- KUBOTA Jumpei, Social Mobility and Resilience: An Historical
Perspective on the Future in Arid Regions of Central Eurasia
from an Integrated Research Project (100)
- КАЖИКАВА Shinichi, Большевицкая власть и голод 1921-1922 гг (128)
- ODA Takashi, The Geographical Space of Evacuation: A Record of
Field Experience and Practices from the Multiple Disasters of
2011 in Northeastern Japan (167)

Book Reviews :

- Michael R. Walters, *Principles of Geoarchaeology: A North
American Perspective* (TOMII Makoto) (208)
- A. Janku, G. J. Schenk, and F. Mauelshagen (eds.), *Historical Disasters
in Context: Science, Religion, and Politics* (SUMITOMO Kazuki,
OKUBO Kazuya, FUKUMOTO Kenshi, MASUNAGA Masataka) (215)
- YAMAZAKI Masakatsu, *Nuclear Development in Japan 1939-1955 :
From the Atomic Bomb to Atomic Power* (YAMAMOTO Akihiro) (221)

Miscellaneous :

THE SHIRIN

or the

JOURNAL OF HISTORY

Vol. XCVI No. 1

January 2013

Special Issue

DISASTERS in History and in our time

Published

by

THE SHIGAKU KENKYUKAI

(The Society of Historical Research)

Kyoto University, Kyoto, Japan

定価 2,000円(税込)

ISSN 0386-9369